

2012年3月29日（木） 17:00～18:05
於 参議院議員会館地下1階 B107会議室

民主党オープンフォーラム（近現代史研究会）

講師：秦 郁彦 氏

テーマ：近現代史に学ぶこと（1）～南京事件を中心に

開会のあいさつ

松井孝治（民主党近現代史研究会幹事・党筆頭副幹事長・参議院議員）

皆さん、お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。ただいまから「民主党オープンフォーラム（近現代史研究会）」を開会させていただきます。

きょうは、座長の藤井先生からのご紹介がございまして、秦郁彦先生に「近現代史に学ぶこと～南京事件を中心に」ということで、アジアの歴史問題について開催させていただくということでございます。

では、最初に藤井裕久座長から一言お願いします。

藤井裕久（民主党近現代史研究会座長・党最高顧問・衆議院議員）

こうやって毎回お越しいただき、ありがとうございます。

前回の半藤先生に「次はどうしましょうか」と申しましたら、「それは秦郁彦先生がいい」と。実は私と秦さんとは学校も大蔵省も全くの同窓の、仲間でございます、無理にお越し賜りました。

本当のことを言いますと、22日にやりたいとご本人はおっしゃっておりました。特に南京事件を（訪中団として）輿石幹事長が出発する前日にやりたいと言っておられたのであります（笑）。うちの穏健派が「少しずらして」というようなことでこうなりました。現実には、松井さんも行きましたが、その問題はあまり大きく取り上げられなかったと承知しております。ただ、わが国においては「村山談話」があるわけであって、その村山談話のとおりには日本はこれからもやります、ということをお輿石さんは言われたと聞いております。

そういうことできょうは、テーマはさらっと書いてありますが、次のページを開けば河村発言とかいろいろ書いてあるので、焦点はそこだにご理解願ってよろしいかと思います。

秦さんは東京大学法学部に入ったときにわざわざ1年休学したんです。なんで休学したのかというと、そのとき巣鴨プリズンのA級戦犯たちに面会し、ついで、当時健在であった將軍たちを次々に訪ねヒアリングしてまわった。法律の勉強はあまりしておられなかったのではない

かと思えます（笑）。本当に60年間この道を歩いてこられた方ですから、必ず皆様方にお役に立つ話をさせていただけると思えます。

それでは、どうかよろしく願いいたします。（拍手）

講演 「近現代史に学ぶこと（1）～南京事件を中心に」

秦 郁彦 ご紹介にあずかりました秦でございます。きょうは南京事件についてごく骨子になる、ぜひ皆さんに心得ておいていただきたい点に絞って申し上げたいと思えます。

この次に慰安婦問題という予定になっております。大抵の事件というのは一過性で終わってしまうものですが、いつまでも後を引くものが時にあります。これが一種のパブリック・メモリー（公的記憶）みたいなものになってしまいますと、時と場所を問わず、間欠的に噴き出してくる。それは政治的なケースが多いのですが、対処するほうも、事実関係だけではなくて、そういう政治的効果も考慮に入れた上で臨まざるをえないと私は感じております。

問題は事実関係なんです、これがまた諸説紛々でありまして、普段それに専念していない方はどれを信じていいかわからない。これはどの事件についてもそうでありまして、日本の場合も、この南京事件に限らず「非常に大きな規模で、あった」というのと「まるでなかった」と。つまり何十万対ゼロという数字、さらにその中間という数字もあって、一体どれを信頼していいのかと。こういう歴史の問題では事実関係をまず究明するのが特に大事であって、事実関係がほぼ明らかになると、そこから出てくる結論というのはかなり幅の狭いものになっていくわけです。その範囲内でどうするかと考えればいいと、私は思っています。

それからこれも一種の知恵なんです、私は主張が非常に異なるときはとりあえず「真理は中間のどこかにあり」と考えるようにしています。どうも同じ歴史学者の中でも、最初に結論ありきで、それに沿った史料を集めていって組み立てる人がかなりいるんです。先入観からスタートすると、正確な事件像をつくるのが難しい。ですから、「真理は中間にあり」という観点からスタートして、後は「中間のどこだろうか」と考えていく。

また、事実関係をきちっと調べて確定させたあと、それを読んだ人が結論として右のほうに行っても左のほうに行っても、どちらでも可能になるように、そうした作業をやるのが歴史学者の一種の職人仕事といえますか、そうしたいと考えています。天下国家を論じる大ざっぱな歴史家が結構いますが、あえて「私は職人精神でいきます」と言っています。

さて、前置きはこのぐらいにいたしまして、お手元に資料をお配りいたしました。後でゆっくり読んでいただきたいと思えますが、この中に「アルメニア人虐殺否定の処罰法」云々という新聞報道（参考新聞記事③）があります。トルコがアルメニア人を虐殺したのは第一次大戦の最中ですからもう100年になります。被害者数は150万人とかいろいろな数字が出ております

が、これがしょっちゅう蒸し返されているのです。アルメニア系の移民達は財力も発言力もある人が多く、折にふれ蒸し返す背景になっています。ですからヨーロッパの国々はみんな腫れ物にさわるといふのですが、フランスでは、アルメニア人の虐殺を「なかった」とか「大したことではなかった」と書いたり言った人は厳罰に処されるという、むちゃくちゃな法律がフランス議会を通りました。いくらなんでも表現の自由を妨害する法律なので、撤廃しようという動きが今出てきているわけでありまして。

この種の虐殺事件の古傷がない国はずないと考えていい。アフリカでもしょっちゅう虐殺事件が起きています。先進国であるアメリカ、イギリス、フランス、ソ連、今のロシアですね、みんなそういう古傷があるわけで、加害者側に対して被害者側が突っかかることが繰り返されている。日本だけがこうした残虐事件の加害者だと考えるのは、考え過ぎでありまして、みんなそれぞれ古傷はあるわけです。

その古傷を蒸し返されたときにどう対処するかで違いが出てきます。日本の場合では、慰安婦の決議をアメリカの下院が通してしまったのですが、同じ頃にやはりアルメニア人虐殺を非難する決議案が出されそうになりました。するとトルコの外務大臣、今の大統領がワシントンに飛んでいきまして、「そんな決議を成立させたら、イラク戦争の補給基地になっているトルコから米軍を追い出すぞ」と。これにはアメリカ政府もびっくりして、それは困るということまで手を打って不成立にしてしまったというように、いろいろな対応の仕方があります。

皆さん知っている有名な事件では「カチンの森」、ソ連時代にポーランドのエリート将校たちの捕虜を2万人、カチンの森で虐殺しています。ソ連はずっと、それをやったのはナチス・ドイツだと主張していたのが、そうではないことがわかってきて、ロシアになってからとうとう大統領が謝罪に行くことになってしまいました。

こういうものを掘り返していくと切りなくあるということでありまして、日本だけではないということをご承知おきください。

南京事件については、教科書も今「あったことはあったが、被害者の数については諸説あります」という式の書き方をしているのですね。「0～40万」という注をつけている教科書もあれば、山川出版社の教科書なんかは「多数」という表現で逃げています。しかし、人間心理として、「多数」と書いてあると「どのくらいの数ですか」と先生に聞くと思うんです。だから、これは無難なように書いて不親切でもある。

この“諸説”をどこまで詰められるかということなのですが、幾ら議論しても、けりはずかないと私は思います。だから“諸説”で通していくしかないともいえましょう。政治家が、「これは学者・研究者に任せよう」という、とりあえずの逃げ口上をよく見かけますが、じゃあ学者・研究者に持っていったら数字が詰まるかということ、詰まる見込みはありません。

これについては日本の学界や言論界には「大虐殺派」「中間派」「まぼろし派」、という3つのグループがありまして、不毛の論争に巻き込まれると大変なんです。論文も含めましてそ

れこそ数百、あるいは千を超えるかもしれない数の文献が氾濫しています。ヤマタイ国論争に似て、みんな「自分の主張が正しい！」と言い張ります。これは幾ら議論してもだめでして、名古屋の河村市長が「日中で会議を開いて議論したらどうだろう」と言いますが、私に言わせると、まず成立しません。専門家を連れてくるにしても、この3派の中から誰を選ぶか、まずそこで大議論になり、おそらくそこでまとまらないだろうと思います。

日本政府は「虐殺ないしそれに類する不法事件はあった」という立場をとっています。問題はその規模・数字ですが、それについて政府は明言しておりません。

では東京裁判ではどうだったか。被害者側の中国は大急ぎで東京裁判に数字を出してきたのですが、国民政府は事件後8年間、四川省の山奥の重慶に引っ込んでいました。戻ってきたらすぐに東京裁判だ、資料を整えろということになりまして、体験者からいろいろ聞き込みをやった。その聞き込みをずらっと並べ、計算するたびに数が違うんです。大体30万人ぐらいだということになったが、内訳は全然詰めていないんです。

目撃証言というのいろいろありまして、極端なケースだと、警察官だったという中国人が「数万人の民衆や捕虜と一緒に引きずり出されて、機関銃などで皆殺しにされた。自分は死体の下になって、洞窟に入り込んで、そこから月の光で見て数えたのが5万7,418人」だと。その日は月が出ていなかったという説もありますが、どうして端数まで出てくるのか不思議ですね。他にもそのたぐいの数字がたくさんあり、個別ではこの5万余人が最大です。

この種の数字を足し合わせてもなかなか30万人にならない。「犠牲者300000」と南京大虐殺記念館の入口に大きく掲げてあって、来た人がまず見るのはその数字です。中国は体面として撤回するわけにはいかないのでしょう。ではその30万の内訳はというと、向こうで本がいろいろ出ているんですが、「八大虐殺現場」だというのがありまして、さっきの5万7,418から始まっていろいろな規模の数字があります。それを全部足し合わせても12万人ぐらいにしかならない。中国人の研究者に、「残りはどこで殺されたんですかね」と聞くと、困った顔をするんです。「いや、あちこちで少しずつ。それが積もり積もって残りの数になったと思われまして」という、苦し紛れの弁明をせざるをえません。

では私はどうかといいますと、軍人・捕虜の殺害が大体3万人、民間人が1万人という試算をしております。ただし、これも“諸説”の中の一つでありまして、初めから「そんな数字は信じたくない」という人は歴史学者の中にもいるようです。

私の著書の『南京事件』(中公新書)は、1986年の初版から20数版を重ねました。20年たちましたので、「南京事件論争史」を後半にくっつけてまして、2007年に増補版を出しました。この中で私は、事件自体より事件をめぐる論争史のほうがずっと興味深いと書いています。ここ30~40年、日本の内部あるいは外部も含めて、いかに甲論乙駁、いろいろな議論が繰り返されてきたかという表と裏の事情を紹介しています。

では、被害者数ゼロと言う人がいるのかといいますと、いるんですね。以前は「まぼろし派」

といわれる人たちは「多少の不祥事はあったと思われる」というので、数字はどうですかと聞くと、絶対に言いませんでした。最近「まぼろし派」もよりナショナリスティックになってきて、「ゼロ」と言い張るので、本当にゼロですかと聞くと「いや、1人かな」と言うんですね。「ゼロか1人」というのが今の「まぼろし派」の主流的見解です。

日本軍が南京に入城すると、兵隊の着ていた服が道路に散乱している。その近くに難民の収容区があって、どうやらそこに逃げ込んでいるらしい。難民区では白人の牧師とか大学の先生などが中国人難民の世話をしていました。委員長はドイツ人のラーベ (John H.D. Rabe) で、委員会は不完全ながら統計もとっていて、20万～25万人の難民がそこにいたようです。

1937年12月13日に南京が陥落するわけですが、13日はほとんど戦闘らしい戦闘はありません。前日に守備司令官の唐生智^{とうせいち}は部下をほうり出し、揚子江を渡って逃げたのです。「おまえら、勝手に逃げろ」という指示を出して、しかしその伝達が遅かったために、大混乱に陥った。逃げ遅れた連中が揚子江を渡って北岸に逃れようとして、船ぐるみ沈められたりしました。

難民区の中に逃げ込んだ中国兵を、17日の入城式、これは松井石根^{いわね}方面軍司令官、朝香宮鳩彦^{あさかのみややすひこ}軍司令官が馬に乗って行進するわけですが、万一のことがあってはいかん、徹底的に粛清しろということで、難民区の中を回って掃蕩作戦を実施しました。中には「難民御在室」という看板をかけて、部屋に入ってみたら屈強な若い男が5～6人いて、額を見ると軍帽をかぶった跡の線がある、手を見ると小銃を握ったタコがある、そんなので区別して引きずり出してきて、中庭などでどンドン射殺したわけです。残りは後ろ手に縛って揚子江の江岸に連れていって、その夜に2,000人ぐらいを機関銃で掃射して殺しています。

その中には当然、無実の人も入っていたと考えられます。尋問もせずに、元兵隊だったらしいと思われる者をどンドン引きずり出して殺害しました。そのとき巻き添えを食った連中をどう位置づけるか。「まぼろし派」は、狩り出しは戦闘行為の延長だ、したがって虐殺には当たらない、という理屈なのです。「無実の人もまじっていたのではないですか。それはどう考えるのですか」と言われると、「いや、一緒にいたから悪いんだ。だから、殺されても仕方がない」と主張するのですが、国際法上は通用しない論法です。

難民区を世話していた委員会は、日本の領事館に「何とかしてくれ」と訴えました。殺害、強姦、放火、略奪などですが、領事館のほうでは「軍人たちがもうオオカミのようになって、我々の手には負えない」と弁明をしている。そういう状態で、国際法的に申しますと、まず彼らを竹矢来の中でもいいから入れて、軍律会議で取り調べて、不法行為があった場合には処刑しても構わないわけですが、一切そういう手続を踏んでいないのです。だから、これは国際法的に到底認められないからだめだというのが良識派の見解なのですが、「まぼろし派」は、敗残兵と一緒にいたから悪いんだという論法を使い、したがって被害者は「ゼロまたは1人」と主張するのです。

今、こうした「まぼろし」派の主張に人気が出てきているんです。ですから、河村名古屋市長の発言問題が起きた後も、このグループは応援をされていて、「WILL」という雑誌が1冊全部つ

ぶすような勢いで河村市長の擁護をやっています。

では、「なかった」ということに対して、「あった」という証拠にはどんなものがあるのか。これは私の観点からするとうんざりするほどあるんですが、説得性のある情報について資料の②で加害者側である日本軍及び政府幹部の当時の発言、日記その他を引用しておきました。下のほうには、各部隊の戦闘詳報の中から関連部分を抜き出しております。

私が被害者数の算定をしたときも、公式資料である戦闘詳報をベースにしました。当時の日本軍は捕虜を殺すのは当たり前みたいな感覚になっていたせいか、堂々と戦闘詳報に「処分7,000人」とか書いてあるんです。これは研究するほうからすれば便利なのですが、戦闘詳報が残っているのは全部隊の6割ぐらいなので、あとは推計を加えていくしかない。

いずれにしても最高司令官である松井大将が南京事件の責任を問われ死刑になるときに、「お恥ずかしい限りです」と花山教誨師に告白しています。彼が命令したという認定ではなくて、部下を統制できなかったという監督責任を問われたわけです。当時の軍中央では、松井大将を軍法会議にかけようと議論になったのですが、結局これはもみ消しになってしまいました。

また、外務省東亜局長の石射猪太郎は、出先の領事館から来る報告を受けて、日本軍の墮落はこんなにひどいのか、と日記で嘆き、東京裁判でもそう証言しました。日本側の当時の公式ないし半公式のデータは他にも数多くあります。裁判においてクロかシロか争うときには、確実なクロの証拠が2つあれば確実に有罪にできる。シロらしき証言を幾ら集めてみても、クロの証拠が2つ出てきたら役に立たないのです。

「当時、日本の新聞記者もたくさん行っていたけれども、誰ひとりそれを見た者も報告した者もない。だから、なかったんだ」と主張する人もいますが、「ああ書きたい、しかし検閲を通らないし・・・」と悩んだと戦後に書いた記者もいます。目撃者や報告者はいても、「なかった」と断言すると、ついそうかと信じてしまいがちです。証拠を突きつけても「うっかり気づかなかった」と言い逃れはできます。

その種のトリックは次々にでてきます。我々歴史の専門家は、この種のトリックをどうやって見破るか。推理小説の作家ではないが、やはりいろいろ見てくるとトリック破りの秘術といったものも会得します。それまでには結構だまされるんですよ、「これは本当の話ですよ。聞いてください」などと言われて、本当かと思ったら、やっぱり作り話だったと。そういう苦い経験をいろいろ踏んだ上で、トリック破りのいろいろなテクニックも会得してくるわけです。

例えばどんなテクニックかと申しますと、手品にちょっと似ているのですが、松本清張さんという有名な作家がいますね。あの人が、占領中に起きたいろいろな事件はアメリカ占領軍の陰謀だったというテーマで幾つか書いています。その中で下山国鉄総裁の怪死事件というのがあります。自殺ではなくて他殺ではないかと唱える人がいまだにいます。自他殺不明としている本が多いのですが、松本清張さんは、犯人はアメリカ占領軍だと。

どう推理したかと申しますと、下山さんの遺体から出所不明の暗緑色の粉末が見つかったの

ですね。何だろうということでは刑事が随分当たったけれども、結局どこから出た粉末かわからなかった。松本清張さんは、「この色、当時を知る人なら思い当たる人もいるでしょうが、米軍戦車の塗装の色だ」。つづいてどこにいたかという、赤羽の旧陸軍兵器廠を米軍が使っていて、そこに戦車がいた、下山さんが死んだ現場と赤羽とは鉄道の引き込み線でつながっている、そこで殺して、死骸を占領軍専用列車で運んで現場に落とした、とたまたみかけていく推理なんです。

一連の推理は説得力があり読者はそうかと思っちゃうんでしょうね。それから二十年后に某社の事件記者がきて、「来週ワシントンに行くことになりました。下山事件の裏づけをアメリカのアーカイブスで探してこいという社命で」。何が典拠ですかと私が聞いたら、「松本清張さんの書いたものがきっかけでそういうことになったんです」と言う。「あなた、あれは小説ですよ」「小説ですか……」と、絶句していましたね。

批判の声が出たとき、清張さんは、「私は黙っていれば小説家だから、特にドキュメントだと断らない限りは、小説なんだ」（笑）、という話で上手に逃げちゃったんです。

この種の巧妙なトリックは幾つかあるんですね。「人口以上に殺すことはできない」、これは誰でも「そうだ」となりますね。ところで、南京の人口はどうかというと、難民区の人口は20万～25万という数字がある。それで30万人殺せるわけがないじゃないかという論法なのです。では南京は難民区だけなのか。実は、難民区は南京城内の8分の1の面積しかないんです。あとの8分の7はかなりの数の住民が居住していたはずで。しかし、「まぼろし派」の人たちは「入っていった兵隊さんの話だと、ガランとしていて人が全くなかった。だから、難民区以外は人口ゼロだ」と言い出し、「人口以上に殺せるはずがない。だから、30万人というのは大ウソだ」、こういう論拠なんですね。

では実際の人口は判明しているかという、これは計算できません。南京市の公式統計ですと、前年末に100万6,968人という数字があります。それから日本が南京を占領して半年たったころに31万という数字が一応あるんです。問題は、南京陥落の直前に政府の要人はじめお金持ちなどはみんな逃げ出しちゃったわけです。一方、難民がなだれ込んできた。それから南京守備の兵力が入ってくる。上海戦で敗れた中国軍が逃げ込んでくる。出るのと入ってくる要素が幾つもあるので、私は南京の人口を確認するのは無理だと思っています。

そこで、日本としてこれからどう対処していくかということなんですが、中国側も近ごろは自由化が部分的に進んできまして、3～4年前に日本に来た南京大学と上海大学の先生が講演をしたときに、「30万は、我々は政治的な数字だと思っています」と述べたことがあります。そのあと1対1で聞いてみたんですが、30万以外の数字を発表したら我々の命が危ない、と。政府からではなく、反日教育によってカッカしている人たちが、何かあるとすぐ怒鳴り込んでくる、だから「政治的数字だ」と言うのが精いっぱいです、と打ち明けてくれました。

そういう状況にありますので、自然に鎮火していくのを待つしかないし、かといって日本人

が幾ら言ってもだめなんです。中国人の研究者自身が自由に発言できる環境が成立しないと、この件は片づかないのじゃないかなと私は判断しています。

その間何となく見ていればいいのか、ということで、実はほかの歴史認識の問題でもそうなんです。日本人同士が争っているという側面があります。もう血相変えてやり合うんですよ。だから「大虐殺派」と「まぼろし派」はとてもじゃないが外に向かっても一緒になれません。

私、前に3派合同でテレビ討論会をやりませんか、と提案したことがあるんです。中間派はどこでも行きましょう、という立場なんです。ところが「大虐殺派」と「まぼろし派」は、まず「誰を出すんだ」「人数はどうなんだ」「同じ数にするといったって、あの人は0.5人ぐらいの価値しかない」と、そんなことでもめるわけで、「朝まで生テレビ」の企画は、とうとう成立しなかったんです。やっと承知したと思ったら数日後に「都合ができた」とキャンセル、代役を推薦してもらって電話しますと、全員都合が悪いと断られました。中国は最近までは、日本内部の親中派とナショナリストがお互いに争っていて、しかも親中派のほうがやや有利だと見ていたようです。そうすると中国が介入するまでもなく、日本の内部でけんかをさせておくのが一番いいと思ったのでしょう。ところが、ナショナリストの幻派が強くなってくると、親中派にとテコ入れするようになりました。現在はそんな段階かなと私は見ております。

ごく骨幹的なことしか申し上げなかったのですが、最後にどんな数字が出ているかは資料④「主要文献で見る虐殺数」をごらんください。まだまだあるのですが、主なものだけここへ並べてみました。これを見ただけでは、判断は難しいとは思いますが。

それでは、後は質疑応答の時間をというお話でしたので、この辺でいったん終わらせていただきます。

質疑・意見交換

松井 ありがとうございます。それでは、皆さん方のご質問などございましたらいただきたいと思いますが、藤井先生、何かコメントありますか。

藤井 私は秦さんとお話したとき、「本当は中国の首都である南京に行ったこと自体が悪いんだ」と言ったんですよ。なんで盧溝橋事件から南京まで行っちゃうんだ、と言ったら、「同じ意見です。だけど、その話重点を置くと南京事件の話の本質が棚上げされてしまいます」と言われました。なんで南京まで行ったんだ、という話は私は一番の基本だと思っています。

私は、昭和12年7月は幼稚園児だったんですよ。12月に旗行列をやりました。つまり5ヵ月後に南京は陥落しちゃったんですね。旗行列をやったことしか知りませんから、今のような話は全くわからない、主題を外れた話ですが、これも大変重要なポイントだと思っています。

秦さんの言われている大事な論点は、どちらということはおっしゃらないで、「客観的事実だけをきょうはお話したい」と言われて、そのとおりのお話があったように思いますので、ど

うかいような角度からご意見があれば伺いたいと存じます。

松井 それでは、会場の皆様からどうぞ。

大田作太郎 (オオタ・エンジニアリング) 私は元は土木屋ですが、地域開発を進めますと必ずその土地の住民と対峙します。先生は歴史家として日大の先生をされている。日大にも右から左、中道、特にジャーナリズムはいろいろな方がいるわけです。私も原爆2世で「黒い雨」の舞台で育った人間です。沖縄でも資料館の会場の設計等手がけてきました。そういう世間を通して、この戦争に対しては私は両方見てきています。私がちょうどそのころ見たのは、曾野綾子さんとの対談をやっておられました。大変恐縮ですが、このことについては先生はいかにも右寄りだと見られております。その中で、きょうお話を伺ったのは、少し中立になられたのかなと感じています。

秦 ちょっと訂正させていただきますと、曾野綾子さんと私との対談は沖縄の集団自決の問題だったと思うんです。南京について彼女と論じたことはないはずですが。

大田 まあ、根はやはり同じだと思うんです。

戦後の知識階級はアメリカ仕込みのクリスチャンが多い。そして非常に右傾化した考えを持つようなんですが、この辺について、先生はどのように論評されているのでしょうか。

秦 ちょっと心当たりはないんですが……。まあ、そうですね、片山哲さんが首相になったときに、マッカーサー元帥が、日本の歴代首相で最初のクリスチャンだということで大いに喜んだらしい。露骨にそういうメッセージを出したわけではないのですが、占領軍はバイブルを配ったり牧師たちが日本に来て布教するのを支援したり、いろいろ応援をしたんです。一時は『天皇がバイブルを読んだ日』(Ray A. Moore 編)という本が出たりした。ひょっとしたら昭和天皇が改宗するのじゃないか、なんて予測する人もいたようですが、結局、占領が終わってみると何てことなしに終わりました。

意外なことに、明治の初年、キリスト教が一応普及したころですね、そして現在と、占領時代を含めて、信者の数はほとんど変わらないのです。そんなことでキリスト教の影響というのはあまりなかったんじゃないかなと私は思います。

それから参考新聞記事①をごらんいただきたいと思いますが、河村たかし名古屋市長は「目撃者がほとんどない。(これが)かなり決定的」と述べたようですね。記事②で「埼玉の上田知事 河村市長に同調」の中で「なぜ人口20万人のところ30万人、40万人が虐殺されるのか」とありますね。さらに、石原都知事が「あれだけの装備しかない旧日本軍が、あれだけの期間に40万の人を殺せっこない」と。数字をうろ覚えで使うのは危なっかしいという見本です。ご本人もどこでその情報を仕入れたのかも覚えておられないだろうと思うんです。先ほど私が申し上げたように、どうやら「まぼろし派」の人たちが言い立て、書きなぐったものが頭に入っているみたいです。三人とも、平均以上にインテリジェンスの高い人だと思うんですが、こういうところでコロッとやられちゃうんだなあということがおわかりかと思うんです。河村さんも「目撃者はほとんどいない」と言うのですが、目撃者は山ほどいるんですよ。だけど、「い

ない、いない」と言う人がいると、つい信じちゃうのかもしれないね。

政治家の反応がこんなレベルだと心配です。せめて、最初に申したように、「数の問題は研究者間の論争に任せましょうよ」というのが一番賢明だし、またそれしか方法がないんです。石原さんなんか、中国でさえ主張していない40万をどこで記憶したのか、中国は喜ぶのか、気味が悪くなるのか、わかりません。危なっかしい土台の上で有意義な議論が展開される可能性はまずないでしょう。

伊田浩之（週刊金曜日） 先ほど「まぼろし派」の方たちがどんどん極端になっていくというか、ゼロとか1というふうにエスカレートしているというお話がありましたが、なぜ彼らがエスカレートしているかについて、どう分析されているかお聞かせください。

それから南京事件の文献として、偕行社の話がでました。その中で、例えば「中島師団長日記」も紹介されていますが、「まぼろし派」の方々はこういったものについても否定しているのでしょうか。

秦 例えば、「片っ端から捕虜を片づける」と日記に書いているくだりですね。この「片づける」というのは、殺すという意味とは限らない。収容所に入れて労働させる、そして飯も食わせる、そういう意味にも解釈できるじゃないか、式の反論をしていますね。そんな解釈はありうるんですかねえ。

「穴を掘って片っ端から処分するのも一案」という記事については、「処分を実行したかどうか不明だ。命令が出たからといって実行されたとは限らない。確認されていないではないか」、そういう言い方をする人もいます。月の光で数えた五万……式の中国側主張に反発しての放言なのかかもしれません。

それから「まぼろし派」の変質の問題ですが、今から20～30年前あたりは、やはり軍隊経験のある人、現地についての土地勘もある人が、かなりいました。そういう人は一応の事情がわかっているわけです。ですから「多少の不祥事はあったが、30万人は多すぎる」という論じ方でした。

これも一つのトリックですが、皆さんが新聞や雑誌をごらんになるときに注意して見ていただきたいのですが、「中国の言うような大虐殺はなかった」と主張するが、中虐殺や小虐殺はあったのかには言及しません。30万というのは大げさだという程度なら、中国もそんなに怒らないだろうと思うんですが、「ゼロ」は問題かなと思うんです。

いずれにしても20～30年前の「まぼろし派」は絶対に数は言わなかった。座談会なんかで問い詰めても絶対に言わないんですよ。なぜかというのと、「虐殺」の観念が変わってきて、今例えば200人でも「大虐殺じゃありませんか」という受けとめ方になります。ひょっとしたら20人でもそうかもしれない。そこら辺が危ないから、「多少の不祥事はあったにしても」と前置きするが数は絶対に言わない慣習になっていました。

ところが、世代が変わってきて、戦場体験も現場の体験もない人ばかりになると、ある意味で机上の空論的になっていくわけです。例えば難民区の委員会の抗議記録がありますが、それ

は世話役をやっている牧師さんが被害者の被害届を書き込んで、それを整理して日本の領事館に持っていくわけです。本人はそれで「3万人ぐらい殺されたらしい」と主張していますが、自分の目で見たのは1人しかいないと言います。そして「だから、甘く見ても1人なんだ」というような言い方をします。

「私は目黒区に住んでいるけれども、碑文谷警察署に被害届受理の警察官が座っているのを見えています。記録している警察官本人は事件を見ていないと思いますよ、だからといって目黒区で事件が何もなかったと、言えますか」と私は反論したことがあります。

親中派も似たようなものです。ああ言えばこう言うで、冷静な議論にならないんですよ。まだ中国の研究者と論じ合っているほうが、有益かなと思ったりもします。

そういえば「週刊金曜日」は、どちらかというところ「大虐殺派」支持なのでしょう。

伊田 本多勝一が編集委員をしておりますから。ただ、本多自身は人数に関しては一切書いていないんです、聞き書きの結果は書いていますけれども、「人数についてはいろいろな説がある」と言うにとどまっているんですが、石原知事なんかは「本多勝一は40万人と言って、後で修正した」なんて記者会見で言うわけですよ。本当にうろ覚えで言われると困るなという感じはしております。

中屋大介（衆議院議員） きょうはありがとうございました。特に史料批判ということなのだろうと思うのですが、今後、南京の現地で新たな史料が何らかの形で出てくる見込みは、きょうのお話だとおそろくないだろうということだと思うのですが、そのあたりについてもう少し教えていただければと思います。

秦 中国側が何か発掘するということも理論的にはあり得るのですが、発掘しても都合の悪いものはおそらく封鎖して、利用させないと思うんです。だから日本側だけで申しますと、私も1986年に『南京事件：「虐殺」の構造』（中公新書）を刊行したときに、「4万以上」ととりあえずの数字を記したんです。その時期はまだ新しい史料が出てくる可能性がありやしないかと。例えば憲兵隊の調査報告書のようなものがもし見つければ、進展が期待できますので。それから、中国側が新しい集団殺害の場所を発見したとか、そういういろいろなものが出てくる可能性もあるので「4万以上」としておいたんです。

2007年に増補版を刊行したときに、「あとがき」で、4万は最大限の数字だと考えてくださいと読者には申し上げます。ということは、もう新しい史料が発掘される可能性はゼロに近いと私は判断したからです。これだけ皆さんが血眼になって探し回って、大変なエネルギーを投入しても出てこないということは、もう見込みがないと。さっきも言いましたように、戦闘詳報が見つかっているのは今のところ6割ぐらいなんです。原則として終戦のときにその種ものは全部焼いたはずですから6割残ったのは奇蹟に近い。

東京裁判で出てくる弁護側証人はほとんどがいわゆる人格証言なんです。「松井さんというのは非常に立派な人で、若いときから中国人をかわいがり、中国との親善を心から願った立派

な人でした」「悪いことはしてはいけませんと、しょっちゅう訓示しておられました」。それがつづく裁判長が腹を立てまして、もう人格証言はこの辺でやめてくれ、証人はこれ以上要らないと言いました。

要するに裁判の場では、いわゆる第一次史料、それから目撃証言でないと裁判の材料にならないのですが、出てくるのは人格証言ばかり。東京裁判の速記録を読みますと、「これについての資料は終戦時に焼却したことを証明する」という、復員局総務課長のコメントが随所に出てくるんです。ですから法廷で争うときに、片や文書資料が全くと言っていいほどない。検察側はどんどん集めてくる。もちろん全部出てきたわけではありませんけれども。実はクロの資料というのはそんなにたくさんは要らないわけですよ。「あの人はそういう悪いことをするような人ではありません。育ちも上品で」のたぐいの話は法廷では何の役にも立たないということです。

石毛鉄子（衆議院議員） きょうはありがとうございました。きょういただきました資料④の虐殺数がかなり違っておられますので、違っていているということに対する見方といいたいでしょうか、そのあたりを少し伺いたいと思いましたが、中屋議員へのお答えで、後はそれをどうしゃくするか、というふうに理解すればよろしいのかなと思いましたが。

秦 はい。異常な数字だけについてコメントいたします。学術的な価値のあるものと、珍しいから入れておいたというものと、両方あるわけですね。例えば「樺山紘一 100万人」というのがある。「現代用語の基礎知識」という参考書が毎年出ていますね。樺山さんは西洋史の専門家なんですが、なぜか南京事件の項目を書いたんです。その中で「100万」と。産経新聞が、どこからこの100万という数字は出たのかと本人に聞いたら、「私が中国に行ったときに、たしかそんな数字を聞いたような気がする」という話なんです。

翌年、どう直っているのかなあとと思って見ましたら、項目自体が全部落っこちたのです(笑)。いろいろな対処法があるものだなあと感心しました。

この表の数字は大した根拠なしに出ているのが多いんですが、ただ、念頭に置いておかなければいけない数字は、東京裁判の判決で20万人と10万人と、二通りあるんですね。なぜ同じ裁判で二通りの数字が出てくるのかですが、20万人は最終判決、10万人は松井将軍への個人責任の論告なんです。要するに有罪を裁判官が判断するには、10万でも20万の、どちらでも十分なんです。ですから、あえて統一しなかったということかと思うんです。

それから台湾の公式戦史では10万人。台湾は、当時、南京戦の責任を負う蒋介石政権の後継になりますね。私も試みとして日中で10万ぐらいで折り合うという解決策を提言したことがあ

いう戦闘詳報に対し、戦果は誇大に報告するのが常である、それは恩賞にも関係するから膨らみがちだと。戦闘詳報といえどもそういう水増しがあるという前提で、2分の1を掛ける。私は、外の人には説明しても通らないだろうと判断して、目減り率を掛けなかったら、数字がこれだけ違って来たという事情があります。

それから「きわめて少数」とありますが、この人（田中正明氏）は絶対に数字を言わなかったですね。もう亡くなりましたが、かつて「まぼろし派」の総帥格だった人です。

閉 会

松井 ありがとうございます。まだまだご質問もあるかもしれませんが、予定の時間が参りました。

最後に、今後のことも含めて一言、藤井座長のほうからご発言をいただきたいと思います。

藤井 秦先生、どうもありがとうございました。お聞きのとおり、一つの結論ではなく、客観的な事実を説明したいというお話でしたが、そのとおりのことをやっていただいたと感じております。

前の半藤さんも3回続けてやっていただきましたが、秦先生にお願いして次もやっていただくことになっております。秦先生はこうした分野を専門に研究していらっしゃいますので、慰安婦の問題を入れたいと言っておられますので、ぜひお願いしたいと思っております。どうか皆さん、ご出席いただければありがたいと思います。

本日はありがとうございました。（拍手）

松井 次回の日程は皆さんにメール等でご連絡させていただきます。秦先生にも今後、研究会の講師をお願いいたしますが、加えまして、帝京大学の筒井清忠先生にも3回ほどのシリーズで、この戦争に至るまでの道についてお話をいただくことにしております。いずれにしても次回は4月以降、ひょっとしたら開催が月に2回、3回と重なるかもしれませんが、ご案内をいたしますので、また奮ってご参加いただければ幸いです。

本日はありがとうございました。（拍手）

（以上）